

とうきょう すくわくプログラム実践報告書(八王子市)

施設名	八王子市立津久田保育園
-----	-------------

1. 活動のテーマ

<テーマ>

自然

<テーマの設定理由>

虫を捕まえたり飼育したり、野菜を育てたりするなかで葉の形や花の色、花の中に隠れている小さな虫にも興味をもっている。日々の生活のなかで得られる様々な発見や気づき、興味関心をさらに深め、感性や表現力を高めるとともに、創造する力を培えるようにこのテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

- ・虫かごや虫取り網を用意し、生き物を捕獲できるようにする。また、生き物の動きや色、形などを観察できるようにする。
- ・画用紙やペン、スケッチブック、折り紙などを用意し、様々な道具や素材を用いて、観察したものを自由に表現できるように環境を設定する。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

虫かご・虫取り網・画用紙・スケッチブック・折り紙・ペン・両面テープ・ガムテープ

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

・クリスマスの日程が近づくなか、こどもたちの間で、クリスマスツリーを作ろうという話で盛り上がる。こどもたちのイメージを形にした、三角錐のツリーを、こどもたちと保育者が段ボールで制作する。散歩に出掛け、落ち葉や木の実を拾い集めてくると、クリスマスツリーに貼り付けて装飾をしようというアイデアが出され、早速実行してみることになる。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

・装飾にあたってまず、「テープを使おう」と声があがる。保育者と一緒に必要な道具を探しに行くと、両面テープを選択し手に取る。早速、両面テープを使用して、落ち葉を段ボールに貼ってみることになる。

・両面テープを使用して落ち葉の装飾を楽しむが、翌日になると、ほとんどの落ち葉が乾燥して剥がれ落ちていた。その様子に気が付いたこどもたちは、「え、なんで？」と、驚いたような、また、不思議そうな目で見つめていた。

・保育者が「どうしたらいいかな...。」とつぶやくと、そのうちの一人が、「のりでやればいいんじゃない？」と、異なる方法を思いつき提案する。賛同したこどもたちは、保育者と一緒に教材庫まで向かい、のりを探してみることにする。

・液体のりを指さし、手に取る子がいれば、「白いのり！」と言い、ボンドの存在を思い出す子もいた。保育者と一緒にのりを探すなかで、でんぶんのりも発見し、合計 3 種類ののりを見つけ、再度装飾を試みることになる。

・保育者が、液体のり、でんぶんのり、ボンドの 3 種類を広げると、こどもたちは思い思いののりを手に取り、装飾を行う。

・液体のりを使用して落ち葉の装飾を試みた子からは、「はっばくつついたよ！」と声があがる。同様に、ボンドやでんぶんのりを使用したこどもたちからも「くつついた！」と声があがり、満足げにその活動を楽しんでいた。

・活動を楽しむなかで、「もう絶対に剥がれないようにする」と言い、葉っぱの全体にのりを付ける子の姿があれば、いくつかののりに触れるなかで「(液体のりは)さらさらだからこっちの方(ボンド)が良い」と、感触や色などの性質の違いに気が付いてく子もいた。

・また一方では、ドングリなどの立体の形をした木の実の装飾を試みるこどもの姿があった。その際、液体のりを使用していたため、木の実の重みで上手く付かず、床に転がり落ちてしまっていた。

・その様子をみた他児から「こっちののりはどう？」と、ボンドやでんぶんのりを使用してみようという提案があり、早速試してみることになる。

・でんぶんのりを(少量)使用した子からは、「上手く付かない」との声が上がる。一方で「けっこうたっぷり使ったら付いたよ！」と木の実を付けることに成功した子の姿もみられた。また、ボンドを使用した子からも同じように声が上がった。なかには、ボンドが乾くまで

取れないようにと、貼り付けた木の実の上からマスキングテープでさらに固定し、自分なりに工夫しようとする子の姿もみられた。

・翌日、落ち葉も木の実も段ボールから剥がれ落ちることなく、固定されている様子を見て安堵するこどもたちであった。



<振り返りによって得た先生の気づき>

- ・こどもたちは、木の実や落ち葉などの身近な自然に触れながら、遊びを通してのりの性質に興味が向いていった。こどもたちは、それぞれののりの色や粘度、感触などの違いに気づくとともに、張り付けるものの形によってのりを使い分けたり、量を調整したり、自分たちで発見を楽しみながら工夫しようとする姿がみられた。
- ・こどもたちが抱いた不思議や疑問、「やってみたい」という好奇心は、こども自身が試行錯誤しながら、納得のいくまで追求できる環境が重要であると感じた。そのためには、じっくりと遊びこめる時間や空間、素材や道具などの物的環境、それを安心して楽しめる人的環境が土台となってくると思った。
- ・こどもの主体的な活動を保障するためにも、職員間の連携は特に重要で、こどもに対する声掛けや見守る姿勢、環境設定など、共通認識をはかりながら保育を行うことが大切だと実感した。
- ・保育者が答えを導くのではなく、こどもの声に耳を傾け、こども自身の発見や考えを尊重していく姿勢が大切である。また、こどもの遊びや試行錯誤する過程に目を向けることの重要性にも気がついた。
- ・日頃からこどもの様子をよく見守り、必要なタイミングで素材を用意したり、時には一緒に探求する仲間となったりして、ともに発見の喜びや疑問を共有していくことが大切である。
- ・こども自身から芽生えた興味や関心に目を向け、それをとことん探求できるように環境を整えるとともに、その過程から得られる発見や、成功、失敗などの様々な学びが、こどもの主体的な活動へと繋がるよう保育を行っていきたい。